



巴菴心齋 叢書 上下

中村俊定文庫
文庫 18
641



高橋中川の寺より

高橋中

の寺より

あはれ

あはれ



今もむろし系橋中川の寺より
こは東山園崎の草庵よかき
径々もいも十のよわりの我の
年さちけきし乃おゆしを
芭蕉公の度句をよみて詠
ふふその世は形つゝさのあまら

土芳の蕉翁句集乙洲の及小文
史邦の少の庫支考の及日記
桃結の陸奥子島風國の泊歌集
多岐門人の古き句集を輯録
この芭蕉句集のいやすをあら
く芭蕉翁の句集を著述して

る一午の芭蕉をうん梓
乃と抄の及句集を小冊
物とて花畧月夕の好士の
袖あすふ事ありあど巻んと
業林井筒の及句集の及ぬに
よるその句をわらうとて年

歴の次第を書きし人年歴は
分りし所を採りて句の題を
み書きて句体は流石なりと
志しむ四季のあはれを
葉乃書きて法集の中より
あはれを採りて句集に
よるべき事

上
二

句選ありて一巻に百十餘句
なりしを採りて句集に
あはれを採りて句集に
追加しそむせる句十餘句
を採りて句集に
あはれを採りて句集に

ちまは「故」正さるる子
人々心ゆくもはるる子

安永五年四月廿二日
安永五年四月廿二日

世を及ぶ阿比事々

正三



春



芭蕉公翁叢句集上

庭洲のほろ誰々の庫より今朝の春
集むおろし心も古残のちかきら
はまもや新年ちりともみみ外
山家よまをさし
誰ぞ年そ齒牙はみみみみ

嵐雪の許より雪月小袖を贈りけり
誰かよふ海西の如くは物乃とも
言の通をたれは結行せん酒
のにおもへしとえ日言まて傳へ
餅をいさへしぬ
二日にもぬるまきとけりたれま
まき立るとまき九日乃聖山に
え日は田とけり目とそえし公れ
都ちなきはる草をいさへし

上
四

薦を巻く人いさきとむのし
御所はまき名にまきむし
三日只は田と題雪月四日
大津路の年事とけりしと何佛
寺にや猪王とまきと侍籠乃面
人まきとぬまや鏡のこけり梅
△蓬萊小笠と伊勢と知さるる
子どに都へ行く友もこけり
古畑や葺はしゆく男とも

よりくつんれと芥花をきく垣根も
萬葉集下りよりききうのよき葉も
一と勢子一度つまらざるなり
うらむきや事おぼしむる教のあ
黄もや解き書きたる掾の先
これ梅も牛も初まると啼つ泣

此草のあつたる

毎まにまき梅さへ余はたきし

伊加のあつたる

揺り手古菓より梅より成りゆく

秋風うす備の山家とよふ 二句

梅ふしおのや 鶯城ぬすは
櫻木は花おのまらぬすこふ
うき咲やまらるる原とみ京太
あまら我の心をたはぬ梅の志

山家

も鼻のむきまき人梅はけのり

伊加のあつたる

唐より塘抄を新よる玉色にて
阿比きまひり

もふ白へうにちる岡を梅乃花
門人何来とち行くまゝあは
馬乃妙しく

わき敷かたくと新の申形を梅のまき
伊勢の非垣乃月よ六梅一本のまき
子と此館の後より一本あつた
は子良子此一のゆりゆりあつた

細代民部息ふあらし

梅乃木に物ヤとら木や梅を
園女うあらし

暖か屋の奥そのゆりし水は梅
山里冬乃案木まきし梅をるを

卓袋真つ月待

月待や梅うけけり中山ゆ
里をる子等梅打乃るを年の鞭
妻よやくくたゆりのふ月と梅

去年の年へるまの人の事とて
 草花のさし事とすこし梅のさし
 梅のさしの山と目せゆる山
 何系新八去年此二月十日
 乃方へ中きり
 梅のさしにむうの一字を
 紅梅やんぬる位を
 上七

乙洲の江戸へ越く時
 梅のさしにむうの一字を
 紅梅やんぬる位を
 上七

吉野の昔話のまゝ二句

イテ
陸の海の中を以て汲かき清くの水
まをりてくさつてふ家下り那

尾別寺奉納

とま寺やいぬ窟もまをる
春のや草乃道
不性やあまの起と道一春の雨
けふ西や善吹くは川や那ま
まをりや蜂の巣つふを招り漏

上八

作家の園に彼の庄新大佛を

○ 夫のく陽を高く一石をくくへ
かきまやまのまをりて一二寸
湯火をくく肩よりく山家をく
かまをりやまのまをりて
指すくはく

瀬の糸をくくまよ瀬田のたぐ
袖よまをりて田螺の海士のまをり
藤ふすくく白きまをりて

鰓やあつ魚一ろまぢり一す

各別

鮫の子跡ふあまら別うち

観子圖傳

白魚やまき目もあくは乃細

老慵

蛎よまも海苔を八老の夢もせて

子里う汗垂く

海苔汁のも縁んをうり涉若梳

ねろくや歯まひあて一海苔の所

二月半に熟りて

水くやこもらまは傍乃雪の音

是標う利敷く醫門せよをながき

知もるふ振の刺一既う那

伊勢くうて

糸垣やとひもかけ守は御事傍

糸垣心をおもそ西の洞をいひ

坊を乃信をお一む二句

躑躅のふもとにたぎるまの嵐の舟
何乃木の谷とも志は白公の如

莊子陰積

唐古の龍借とらん飛こころ
蝶のふもとにたぎるまの嵐の舟
起るくわの友をまんぬる胡蝶

古本亭

蝶の羽のまなこゆき埃の屋根
古池や蛙とむむ水乃さる

まきこ目し物くくくぬを産く那
系中や物まよつるは啼ひさる
雲者よりよみおさるみ味あ難

古本亭

父母乃頻くくくくく雄子のあま
ひさる啼中は松子也終子終くま
蛇くくくまも思くくくくの草
杯くく泥を落くくくくくく
煤あうて埃くく家くくくくく

雀子と鳥多啼み守荒乃巢

田家にかつて

麦飯千やつてゑう猫のつう
猫のゑやむとた園乃終月

湖水眺望

辛崎の招き花より眺るる

家らまて故人無列

二投又見れ初より鹿乃角

雪のうら落し事成梅の都

落さまよ水糸一より花椿

梓打の渡

は掘乃むり一接と梅の木

山途来く何處より其の草

呂九う詠まき花きり試のむ

賞得よ事あるまは塚のすれき

善提山

山守の忠告と母老なり

二高秋

教つてを門をむくはるる毎東

蘇氏尚令有職の人を侍るハ

物に名をまのしぬ萩乃わの葉を

茅全の画像

薄さくはるる葉やさくや厚き家

本乃は情をや生ぬく喜入る草

ま柳の涙をくまくまの涙干か

信乃乃人の子徳と松風別路

うけ

草の戸も位うもか伏る雛の家

伏ん西窓も信とくまを

我をくくぬくは拙の 香をさ

まを菴の拙極くく内人よま

嵐をめ

あ乃子に拙と拙や草は候

始へま候く我を吟ね拙の花

咲くは柳の中より初さく

伊加と聖蓋所寺初舎

初ささるる折りもふかよは日形く
影くしぬぬあふもあふく川橋
赤良七重七重八重八重
西の橋をさす

多儀は風折くゆらん山ささる
習もく甘きを酔てあ人土芳

大仙寺にあふ
命あふ川中も活きぬ梅の那
山はくく風ぬくその中二ツ

権左子は君ふ野は花見澄ささ
くふふふふ

換くゆりねささあき梅のふ

ささのささ事か

芽解はく梅のささ梅のささ
梅のささささささささ
廟あく酒くも陰やちささ

山家

梅のささささ山家かのかささ

似命一や豆の粒先一に梅の葉
一本枝のそまけも籠もはらうらふ

万平別墅

春の夜を梅の影を花の影を
春の夜を梅の影を花の影を

白雲の如き

阿蘭陀も花の葉にうらうら
阿蘭陀も花の葉にうらうら

愛方知酒を貪る鏡神

花のうさせわの酒白く飯を
艶なまやつてまのや誰うそ乃
世のうらうら花も念佛やうら
菜畑の心形も雀の羽
観音の薨るやうらうら
花のうらうら七の鶴のうら

物皆自得

花の遊ふ社をうらうら友すの
鶴乃巢もうらうら葉の葉うら

るる菴

花の無き鐘より響く海を渡る
 雲は松本とや谷の先まのくちし事
 あつきのよふまのこころゆるらば
 らすくはまの二様の事れりのかに響
 へくくくくくくくくくくくくくくく
 とくくくくくくくくくくくくくくく
 〇 糸清も花見の望よりハ七々集
 舞舟を居る鐘を今もく括るおとこ

くくくくくくくくくくくくくくく
 糸清も花見の望よりハ七々集
 舞舟を居る鐘を今もく括るおとこ
 けまらぬを花よりれりか別か
 花の無き鐘より響く海を渡る
 雲は松本とや谷の先まのくちし事
 あつきのよふまのこころゆるらば
 らすくはまの二様の事れりのかに響
 へくくくくくくくくくくくくくくく
 とくくくくくくくくくくくくくくく
 〇 糸清も花見の望よりハ七々集
 舞舟を居る鐘を今もく括るおとこ

高尾屋村まで

花の陰 遙く似る 花遊の那

かつら 花の林を 通るに 四方は

さくら 花の影 かくさ 影は

あけの 影を 照らす 影の

ちあ 影の 影の 影の

つと 影の

花の影 花の影 花の影

二つの影を 照らす

こいさき 花の影を 照らす

路草亭

花の影の 影の 影の

伊賀の 影の 影の

乃 影の 影の

つと 影の

一里 影の 影の

花の影 影の

花の影 影の 影の

珠碩の酒は事記ありて

空方より云々以入事云々 湖乃彼

尾法の人より酒酒一樽本言の指括

系一程然りとて以人よひらむて

飲めく花生りせん二株 樽

肅山のり免まき 推雪の画を琴乃

撰り

夏花やももはるく 琴乃 琴乃

借専吟 餘別

勢れものあまきあろせやものあ

流活云々

西行のさるもつれん 花乃 魁

空序子 深川の藤今を云々

花乃 柳系

様と云々 柳系云々

花乃 柳系云々

花乃 柳系云々

上 柳系云々

さしつかへなくおのまゝに
さしつかへなくおのまゝに

四つめらゝの梅ぬき見くらゐ
支考東初録別

世くらゐ推せよ花より又雲一々
幅幅も出よう青世に花より

路通もちかくも遅く時

さしつかへなくおのまゝに
子に傳へし人ぬき花より

さしつかへなくおのまゝに
跡踏もしそれ陰舟千穂はく女
丹波市とぬき花より

さしつかへなくおのまゝに
山吹の家も花はたのきも

西河母

からく山吹もるを花より
やまぬき花より

画溪

山如也やう治の膳炉の白ふ時
種草や花乃はつりも愛阿の
鳥の喜やわたり能操あさ
こまの如く西や二葉乃茄子こま

初瀬あま

夫の如くや霧り人ゆり一書の隅
鐘撞ぬ里なき何をりなき能くま
りまきり一わたり能浦まを退けり

お逢ふふ里はれと心胸あまうり
新春や多時魚の目なき如く

至湖水情ま

けしき我のあまのひとけりま

夏

中島野原の草花のつぼみ

つぼみ

つぼみ

旅行

つぼみ

つぼみ

清く静く早き旅の部

つぼみ

つぼみ

つぼみ

つぼみ

つぼみ

つぼみ

つぼみ

つぼみ

須戸の鑑の矢先子啼や子親
江のくさくさ清ゆくくさく鳴り
西海まわるとはさうふふふ
やうやうや

藤木もやうくく此富貴の時も
鶴代ち馬よき送る此台所の男
短冊のさきよきくさくさく
こころのさきよきくさく

○ 孫を懐くくさくさくさくさくさく

不卜一月忌終風動進

ほやきき次啼もあまきい硯糸
京母くまき京母くくや母も

皇女もく

△ 蜀魏大舟教をもま月夜
江のくさくさくやあふくさくあめ
才のくさくさくさくさくさく
藤木もあまきくさくさく公
保くさくさくさくさくさく

一 おくの江も横のやちいさ
おのこたあある様もあふく
暎やまの朔日中かき
思ひ守たまふや日月は様
さるる心く度の子をむ
けりておのこたのち
灌佛の白かまきり
灌佛や皺手合するお珠の
友はあくまをこころ

楳の実や花形まの世々く酒
園をま大願和尚くむ月
もくはは作し給ふく後
こちきりあくまの道
うまゆきり
梅をまの卯花もむ涙の那
其南う母五七日退
卯の花を母じ家そと
うけりまやうく柳乃るこ

春風亭の遊楽ありて

杜若ありまよひ遊楽句能たきとひらり

大坂史記或人の評を

遊子も花かたも杜若の記とひらり

山崎宗鑑屋敷まで近き殿乃

宗鑑もよそに杜若の記とひらり

杜若の記とひらり

みかたも海あんかたつとて

杜若もく水邊の記とひらり

白々や雨の花は咲つとて

贈杜若子

白芥子に相もく蝶のかたつとて

漁人の影ちる花は咲つとて

くにんかたつとて

雲の影まの記とひらり

まはりや草餅の植り出つとて

伊豆の園地小路乃葉門あま

志は杜若の記とひらり

ちよくもまはれ花の道しほのまゝく及張
 のまきとつをまきこひまのくおま
 りさゆもふ種まらうらんままらう
 甲斐の国山家母さうらう
 り弱はまらうらうさむやうまの難
 まの穂を固くうまはらう帰ひまら
 武府まらうまらうく河清まら
 人くまらうまらうく舞別の句を
 ちよくまらうらう

まの穂をくまらうらうくまらう
 二及相まらうらう許まらうく今や
 東つらうらうくまらう
 ちよくまらうらうく分ちる穂のまらう
 贈拙隣新宅自画自後
 ちよくまらうらうや牡丹乃花のま
 招提さうらう鑑真和尚のまらう
 法眼れまらうまらうまらう
 まらうらうは目れまらうくハまら

日光寺

冷くきうと暮る葉のあまの日光

後磨の浦一見の時

すさくちのねねの葉さくもくも

雲のちも奥の佛僧和尚の山居乃

記あり

本意のちもやぬく次友もくち

くちの奥國のちもあまの位持乃

乃ありの位持のちもはははは

上 廿五

信はくも自ら及馳重くまんは

卯月かき先入のち

先事かむ推の本もりり友もま

松風乃ちもあまのちもす

清然のちもあまのちもあま

甲斐の山

山は乃ちもあまのちもあま

あまの山麓のちもあまのちも

大垣の城を日光寺代系勅を記す

扈從を圍田何素をいしむ

世のあはれよかきく一為くいふ

画談

○るがくく我を強うきく及世

落拵のぬいばいさきいさきい

くさきやあきき

とゆふ人かきくんさも及の

孫肩ふ人を投おの夏中う井

殺生えにさ

石れもや、及もあく、殺生え一

高館

其草や兵とも、及もあ、流

井のまや推とまの強れまもい

小樽を愛うく

うまゆや井のまあ子とあ、人の果

田度むすむ、深川の層をいさき

うらまや井のまあ子若をいさき

能那一はあ、一あをいさき

うた我をいかにしるべきよかんとき
遠出よかひ屋う下乃ふまのき
わの宿ち敷の小まきい志強走か
かつ不賣いふぬ人ぞ碎きん
鎌倉を生きく出もんころり
うらみ乃流せ

悲耐を流下新ち夏の初
あや先生う新の觸乃さきこころ
俗士にいふまじき又日官を園求る

を刀を詠又日と也死さしてきて

花のやめ一夜子かひしゆらんか

佐藤屋自ら書紙のまに義經乃太刀

舟草ち舟をともあそ什物に

矢の志ち刀も五月廿のし紙幟

仙童子入るあやめちて是書子かた

とそ若くは紐のほだ付る草鞋と錢

あやめち子足り結んち草鞋の結

擦ゆる行ふにさむむむの髪

病中自叙

髪をくくると中容顔蒼蒼十一日月雨
けしきさうしうかきまぬ物や津由の橋
兼頼の巻もははの五月雨よみ
けしきさうしうかきまぬ物や津由の橋
〇 髪をくくると中容顔蒼蒼十一日月雨
先堂と七宝ちうしうせき珠の廓
風子やまき金の程まきまにちう
五月雨忠降乃くくくや先堂

はくをあらめくちうしう上川
日比道やまきかめくく五月雨

落柿全集

五月雨や色氏のるまきくく
まきまぬ物や津由の橋

露沾公事

まきまぬ物や津由の橋
大井川のくくく
まきまぬ物や津由の橋

五月辛酉の通事は思ふにやうなるに

月半かゝる時や対さう五月の半
後何処やとふ掃も葉は白く
眉掃を付にしと ねんさ
つましくと枝の花乃神年ちふ
せんうと掃や面は 必々さう

葉つて白事日に日と後あつて

やうとせん蒸の杖年ちふ日ま
象深や西年 為掃う福ふの花

栗の木の法を事終ると世々のふ
俗あり可伸とふ

世終人乃乃身ぬふや新の葉
筆白くふも終る義隈の松見勢
中世ははらうと錢ありりる
掃より松を二木を三月こ
世の法や新を小庭終別う度
あらしとや帷子時乃うと法葉

為掃舎

柳花の影をみむるは人の料理の間

森川許六録事二句

推乃花の公女を似よし事雪の積
うた人花挽中もかりし本も花縄

山中道中

登風馬の尻すく 捲ゆ空

この境とていふはあはれいふは
乃中世

うははり角ぬりわもよは摩沙の

あやうくく 荊を つくもあはれ

本を雪の積思ひきて大津より
あはれあはれ乃雪見はむ

これほたる田の月よりくくえ
茶乃茶をさるよらふははるふ

あはれあはれ雪見

あはれあはれ 船頭碑くえん中
己う火をさるの雪や茶乃茶
あはれあはれあはれあはれあはれ

奥州白川あり

南ちの宿哉よ鶺鴒中同よのを

大津湖仙あり

この宿を水鶴も〜ぬ籠かき

高川ふも〜さなま〜さほむ

たは山田氏の家を〜あり

水郭なり〜人の心も佳を海へ

鶺鴒ふも〜あはれん〜幕後

〜ねむ〜あり

中〜事〜心〜おの川乃結 鶺

鶺鴒毎通〜るあ〜程〜

たもろ〜てや〜と〜た鶺鴒

両折〜思〜早苗れ

は〜水〜鶺鴒〜

あ〜て甲の〜

と〜は〜柳の〜

ゆ〜り〜

田一枚 極〜

奥が今の白川もさる二句

つら苗もも家色もさる日敷くれ

西へ東へすの早苗もも風吹き

多窮らふも行く白川の関り

ちんちんちんちん

○ 風流のそよば行くは田植うこ

志がよの里もさるすのそよば行く

つら苗もも家色もさる日敷くれ

集付一馬の力もさるや田植うこ

尾張もさる者更にもあさ

世も枯れり代り小田行りりり

羽尾山もさる行くは行く園もさる

重行もさる

免つりや山もさる出ぬの初茄子

清田堀本氏もさる

昔もさるもさる葉もさるや茄子

牛膝日

陰もさるもさる極る日々もさる

明石夜泊

晴きやともけきい夜を夏月
月をさるるも物きくはきや清たの夏
もきくとも木根のゆふの夜月
其乃月清ゆりあき中赤坂

曲習い

きく乃物きくはきくはきくはきくは
指さるるあき中赤坂

稲葉

撞鐘さきひくきやうけう様のさき

立石寺

案さやきくはきくはきくは

多事迅速

やうきぬあき中赤坂

人の子

いそやうきくはきくはきくは

船

周扇さきくはきくはきくは

佐野の中山よ

今からまじりの花差の下すくそ

風瀑を越列き

月手折まハ小夜後の中山よそす免
破風台に月影やとらふ夕まきみ

長谷川十八樓

此あま重月あふゆふとれ皆まじし

尾花は清風を

涼しき風月を留めて静まるあり

すくまやちの三日月はお黒山
あつま山や吹浦りけて夕まきみ
ゆくや鶯脰めまきそ悔すし

花枝と漕とよまきく梅の老木

西のは海の花念をのり

夕まねや梅まきむ浪乃花
小潮まきく柳まきくや雲う勢

甲斐川系納涼

川風や岸のまきあき夕まきみ

田家

飯あかく焼うちきくや夕すらん
川中流根まよふらふすくこのね

聖地深居をよひまらけり

さとりはららるる園子もあはれあふ

雪まきうらぬま松を植るをそ

涼さやとくにとけ松の枝の形

まきしはを陰まらけりうらぬ松の形

風のまきまらけりうらぬ川

羽黒山

有るやまをがかりは 南 谷

丈山の像平得は

風まきつゆ織を纏もつくろつを

さけや風のかほりお お松子

小倉山常宿もはそ

松杉をほろそや風はかほる音

雪のまきつゆをらまそ 月の山

湖や果を織れむそ乃峯

本間と馬の家名を稱して二句

ひらりととあらる廟や中々のまね
蓮乃香に目をかきまひや面乃鼻
夕靄の白くおのほ葉よ紙帽とら
ゆふの白や酔く顔出き窓の穴
夕かほふ下瓢むつて遊公もり
そそりて下み揃きむむ衣をま
被りて花のみしりの夜移るる屋
りまもつよそ思ひ笑ぬ此むらん

李由の汗へ又のまじり

まじりかにかきまひてそのまの山
何ぞおは波室を古きまじり
此のまをまじりて下は結の程程
まじりて花まじりて下はまを
接面のまじり

あつた花まじりて下はまを
接面のまじり

山のけやまをまじりて下はまを

初きの葉も何れもや
花も実も一皮も此れ
夕小も折るもまつら
柳ころり行るも
之道も
我下り似れ二ツに
ふりた皮むき
正成像 鐵肝石心此人之情

接子下りかた
酔く海人
藤の葉も
さしれ

岐阜山

城沼や古井の
那須の温泉
湯をむす
湯をむす

ひまふくもや甚ましくも

晋の御所をうやむ

窓形よ空を待のこもやまをむしり

子子の身はつらさをきてまの

許へつらり

けりまご人の小神も今や土用を

修路光明もして行者事をせむ

友山も足駄をおむそ途の那

秋鴉も人の住系に對す

山まを越もこも入るや交坐委

松島

鳴くや中江も其志海

新在風水亭に

水のたぐ氷室も多分柳の如

異さし目を悔子入るる川

水も自らそく病や好日さく

さか月や翹々河社も境くら

ら月や嶺より平をく嵐や戸

不卜亡母追悼

み向く終るに終る道明寺
かましくさくふるまきう上の鮓乃腸
世に夏や湖氷まううぬ浪のこへ

本節亭まきく

秋ちうた公のうらや 四孝半

色蕉翁翁祭句集下

秋

初種や海をさす田の一みとる
まの妹やまをまぬか坂峠のむら
文月や六日急事乃夜中か似と
意海や佐渡に掛るふたの川
合款のまはるるまはる星乃教

ふんぞりく霞園くらし中の聲
の響きのまぢけのまぢけのまぢけ
ふ賢ぬく松の下や堪輝
古田乃社をまぢけのまぢけの
切をまぢけ

むさんや甲の下にまぢけ
床まぢけく廻り入るまぢけ
杉野やまぢけのまぢけ
まぢけのまぢけのまぢけ

故襟ももろくそ秋のまぢけのまぢけ
寄書下

松つらまぢけのまぢけのまぢけ
このまぢけのまぢけのまぢけ
或智識の曰まぢけのまぢけ
まぢけのまぢけのまぢけ

いかなまぢけのまぢけのまぢけ
いかなまぢけのまぢけのまぢけ
松書や園のまぢけのまぢけ

傍わさくふく死かつふは乃松

嵐雪の画に漢を望むれど

形影を下の地まきくをるる事

接するはるる人々廓おまほり

とさきまうらふきりふ

胡白く酒をまきくぬはうりる

困閑の流り

相うはやくをるる鑽もつは門乃垣

昔亦や是をまきくわの友かきり

相影のをり啼ゆく敷のよき

萩を亦や一夜をまきくせ山の犬

松引まきく麻もつは一回のまき

女あま二人をうらむる年をる

男れおるも変て物候をるをばん越

ほの玉を新写するの空を遊女候

来りすまきくは昇まきく男れ

本あは

一家り遊女もねりり花と月

小松と云ふ西に

志白りたみや小松うく萩すき

銘水まう雨の中會

ぬきくひ人もおうやるの萩

畫像

白露もあはさぬ萩のう移るうれ

後半去序子終忍の事にはうさ

をさく

風色やーとらに種ー庭の萩

浪舟や小貝にうー子萩の多
萩の種や跡をつくも産生門

深川店

色通やうと鹽に雨はまておうさ
こはもなき庭ーと心のちるん那

西渡

勢崎やそは萩に苦き蕉やまぬ
心はゆくと萩あきや女ら花

玉川の地ふおはうと

又

ふも月やお鳥の夕まゝしつむらん
河津の見えそはかぬの月の
三日月と地を眺むる若草のま

嵐の暮るまはて

ふも月やお鳥の夕まゝしつむらん
河津の見えそはかぬの月の
三日月と地を眺むる若草のま
杜牧の早行の跡を小あかしの
くもちまもつむく

るよ藤と跡を月まぎし茶のくさ
月をやし一本すゑち雨を待たし
明かのや二十七夜も三日思月
月ららら酒をまゐるにまはる
都の人よかた物づくはなも物ま
さるるふ思ひもかきぬ無き人
法鏡のまゝの公せし居るまはる
ら乃中のみ跡をまぎし若草の月
文科山と八幡のふ里と雨を

横をぬく冷くさるるもあはれ
くさるるもあはれ
あはれ
いふもさるるにさるるもあはれ
あはれ
らんと思ふもあはれ
併や姨をさるるもあはれ
善光寺

月影や白門白雲をさるるもあはれ

悼遠法師看法印

そは魂を羽黒まよふ世は乃月
月乃さるるもあはれ

燧り山

義仲の森をさるるもあはれ

湯屋峠

月影をさるるもあはれ
新田の御所をさるるもあはれ
上人の御所をさるるもあはれ

遠路往來能知ひき

月清し遊ちのりて舟砂乃く

種々海あり

月いつと清し志のめる海乃く底

戸をひききら西よりあつ伊勢と

花ももよるにちかきもよる

花のまふ月もあはれきり一伊吹山

又去る妻のりりまのやうにんかた

ふれ日向守の妻おぼや切て席とのり

らけりりも今更うちせ

月さひよほおの妻乃けりきん

洲のまや拾もころもきく月を

正秀亭初會

月代や猿もみ残るる宵は内

環のく月さく入よは伊勢堂

はあをるはきりや一たなきも母

よるのた物もそ者くらはあをる

ほろおほ信をるそあひのよるを

よふぬら信所をよまのその傍に
かひうらむ

紫花の月やそ結まゝの坊

そくろのつら

梧桐のしるやそ月の夕紗も

あふれまゝのひまも色なきを

きまき葉を揺りて舞ん 宿志の月

深川のそよ風をたのふそよ風

川よとそは川下や月乃友

東野を人の湖よよはれて東野よ
ゆるぎをわ

入月の松を机の田隅の柳

月下に雲を遠くよよ懸て

月すもや揺るるるの松の佐

えの影やそに行るるもそ月夜

月をよよ玉にそ花をこめ先

武蔵守素の仁をそよ

秋先とそ

○ 明月出也 月中一箇條
 名月也 沙汰也 中一箇條
 根本寺の隠室より人より
 深者より金きり也
 寺に傳へたまふ形也 月は
 中一箇條 人を体も 月は
 聖人より人より 中一箇條
 海安指さす 信ありし
 法が如きの指さす 一箇條

あさひの月

あさひの月見乃旅のめし
 名もや 山國白くさく 名もや

古寺松月

名月也 望月也 名もや
 名もや 見建る 名もや
 名月也 湖千一向く 七小町
 名月也 二つ有くも 名もや
 名月也 門より 名もや

君自れ花にさかしく涙を
あふす中 柿屋のきりや 田舎の
あつきのさかしく涙をさす
と申すの門にさかしくや 今日の月
あつきの友をさかしく涙の月乃き
と申すこれ吉野の月も十お里
本を伐と牛らさかしくやらあ月
十のおとまの史料の郡の
やきとさかしく涙の月乃雲

望田か

さかしくや 柿屋のきりや 田舎の
あつきのさかしく涙をさす
と申すの門にさかしくや 今日の月
あつきの友をさかしく涙の月乃き
と申すこれ吉野の月も十お里
本を伐と牛らさかしくやらあ月
十のおとまの史料の郡の
やきとさかしく涙の月乃雲
さかしくや 柿屋のきりや 田舎の
あつきのさかしく涙をさす
と申すの門にさかしくや 今日の月
あつきの友をさかしく涙の月乃き
と申すこれ吉野の月も十お里
本を伐と牛らさかしくやらあ月
十のおとまの史料の郡の
やきとさかしく涙の月乃雲
さかしくや 柿屋のきりや 田舎の
あつきのさかしく涙をさす
と申すの門にさかしくや 今日の月
あつきの友をさかしく涙の月乃き
と申すこれ吉野の月も十お里
本を伐と牛らさかしくやらあ月
十のおとまの史料の郡の
やきとさかしく涙の月乃雲
さかしくや 柿屋のきりや 田舎の
あつきのさかしく涙をさす
と申すの門にさかしくや 今日の月
あつきの友をさかしく涙の月乃き
と申すこれ吉野の月も十お里
本を伐と牛らさかしくやらあ月
十のおとまの史料の郡の
やきとさかしく涙の月乃雲

草はさかしく女西のさかしく涙を

舟乗新らふ舟をさめく

粟稗子まじりくもつまの春

知る才人まじり新宅をさめく

とまじりや雀とけしめさうの粟

事く未だや新増の枝のさめく

新くや石のさめく新赤く

雨人彦牧事とさめく

若く種く舟又本はあく

枝や命をさめく若くはく

遊女畫續

枝ゆり新日おくかま新葉の春

旁面乃やをさめく葉をけく

何とあく小家の秋の柳をさ

秋海棠西原のさめく

鬼灯とて其もさめく

若母とて或坊母とさめく

磁赤く我玉園とさめく

猿引も猿の小神をさめく

小枝を遠くまで別れを告ぐ

拍子よく扇引はく余波う那
相のたまり勢備かゝる塚の肉
奪は目乃今やとれめと啼詔

望田よそ

痛く思ふおまをに落く旅を憐る
輪す免葉の木畑や 迹 交
刈詔や子福こゝくの野の草
き乃名はまゝとらて四下を

板の裏らる様子の物もや物あゝ
目よかゝるやまゝとらて四下を
いゝと啼 志るぬり也一板の麻
接やまのあひひもふ駒むらゝ

言の葉の清きとふむをこらて

無火下へは麻やほの下むきひ
粒まともふ吹くく聖かゝの那
吹ともは石を歩るが野分は
いゝの破をたふす風あゝとらて

世はしづかに風をよみしは身こそ
 山にても通るにやうの松子の聲
 猿もさかしく人すて子に秋の風いふ
 けしみの葉盤う塚わく伊勢の古
 うひひきさういふ松の葉に秋の風
 いつそはたわらむらうらんまのま
 義朝のこけしに似てらるる松の風
 秋のそや敷もさうもさうふ破乃穿
 身みしそて大振るる秋の風の聲

一笑退の巻

塚もさうさけしに似てらるる松の風
 けしみの葉盤う塚わく伊勢の古
 那谷もさうさけしに似てらるる松の風
 らんまのまのまのまのまのまのま
 石山もさうさけしに似てらるる松の風
 拙夫の名をさけし
 松のそよその葉ちかすれ秋の風
 松のそよその葉ちかすれ秋の風

彦右社銘 人の形をうつる如き
己の長を短事なれ

○ ともいへも唇をきく 秋の風

去来つ許より伊勢の記のきく
くも我の心もわたり

西東あそむる同 阿蘇社風

山嵐園を悼

秋風を打く無 花葉の枝
入麩の下焼 くるおきく

旅窓長夜

○ 九月夜起くも月影七ツコ

車庸亭二句

秋の夜をくも雨 鳴る那
おきくまき秋の影 鳴る
大和の玉井の内

孫らや藤君のきく 玉井の
菊の花の影

○ 秋をゆく 鳴るかめ 菊の影

多事乃雨

起上る事ほのつぬり水の跡

もく笑け九り名述したくの事

此の地の事おぼやかしき事さす事

能山の宮さひききききき酒乃

あまの心をすくぬくおぼやかしき

とねとね思ふ事年経す事やうね

らんひき

しよひらいつ事今おぼやかしき

山中温泉

山中温泉の湯の白ひ

本因亭

かゝ事おぼやかしき月と事おぼやかしき田之反

神おぼやかしき日りかた事おぼやかしき

九月の日の別三様を事おぼやかしき

事おぼやかしき日く山て事おぼやかしき

事おぼやかしき事おぼやかしき

田おぼやかしき

梅の木の枝もあつてこゝしと書きたまふ
大門通をさうして

琴の音や古物店乃宵の戸の菊
行来本流の豆の音うまそめてまき
きらくの音花の音とてまきかたね

蝶をきくもく酢をきくも菊の鈴か
休山水さうさく

新まらや菊の喜れすも豆腐ト
八所船まで

ふくは必笑や石屋の石花の同
危懸うも男乃心成つて山家集
乃起りまらふ

一露もこゝ白くぬも菊も氷の那
菊の音や花の音もさかたの復の音
あやの音もさかたの音もさかたの音
菊乃音やさかたの音もさかたの音

菊の音もさかたの音もさかたの音
菊の音もさかたの音もさかたの音

生玉もさうり目さうさう

菊の如く赤良の秘波もさる月也

園女家也

白菊は自ら下さくともさる茶也所

後醍醐帝の法陵を祀む

清原直を神と志のから何ぞ忍ぶ

本雲は掬くも世乃く心もさる也

怨心別巻

義経居く生の実もあつと拾へ也

下二

秋風の吹くもさう一粟のい

可休亭也

祖父と親おのりお庭の枅も人

に里親也也

里よりさう枅乃木もさる家也所

志ぬ枅や一口さうらふ積乃つ

菊乃露落く拾へハぬさうれ

草うらやあふさつさ子夕一とさ

松草やさうさう程も松乃形

もつ草やせしむる秋の露
松草や〜ぬ木北葉の〜り付
伊勢此山徒は山遊とて事そ
若草とて花てりし山依り
中秋の月をよみ科の里嬉捨山
りしあつて松葉をよみ月中
かおとけりし月十三夜をよめ
木乃好徳とすしきよめ子後事
早吉の市よきと

外常くかあかたる月見う那
秋もやましく雨も月乃形
内文をよみし事りてお文のほま
ぬはりて
さるとは小皆押合ぬ清遷官
兄のち代をうりしお母の白髪をよ
〜りしお母の相好う眉もや
若草とて事りし〜り
〜りし〜りし〜りし秋の露

秋風や桐子くくして苦み秋葉
〇 見えしを御事とてなれど遠く秋
葉をせしりて空をさす古
田

送る道に送るら果はまらるの秋

種の宿を遊ぶ

はらけしや遠くよかちて遠く秋

小倉本は相室無の

秋は遠くはるやすきよ小松川

秋懐

此秋は何と遠くよかちて
秋のよはるをいそぐ人そ

憶老杜

風葉を吹て夢秋歎するも誰ぞ

去る秋をいそぐ時聖とて

心よよひて秋をいそぐ

花もよめ秋葉のよかちて秋をいそぐ

枯枝よかちて秋をいそぐ

幸門のや年の像のさかすか
顔のさかすか

あつたまをさかすかにあつたあまのさかすか

新思

け道やけ人形の小秋中のさかすか
人さかすかけ乃帰るあまのさかすか

清涼のさかすか

杉風乃秋をさかすか
行止や身まじりさかすかの布着

さかすかのさかすか

鈴鹿のさかすか
行止のさかすか
ゆくあまのさかすか

冬

相葉の如く心へはつらつと生れ
葉もまんとせし程なり

此海より子種を採ん置しこれ
よりおろし大もしこれをおのろし
江戸を立出さし

○ 捲くところの名は見えぬ初めは

一尾根と一ころく雲らるる生
○ 山株へ井も新から新なる時
初し自ら種も山を巻をひけ
つく志らまじりまをもち捲く時

草子

人くをしころねよちりるも
けあや田のあは株のあむむ
日向の野塚平らあむらうと
宿りして名をまのしす種れ

○るうこま志くくし時ぬ乃大井河
○くあさうらま人もこよまこころ鐘を
新葉の生そあそ早きしとね成
英徳宗辨矩かうれんむく
伴う本誌庭をらあひ志をれらる
人の方へしめせむ
初しこれ初乃字とわの時ぬう給
一しとまき碁や降く小石川
そと庭や月もいしるる雲乃吟

○
あまのりまこよら人せしうら
○
金屏の松枝古ひやあそも季
贈酒をゆ水の破を這せし田標
昔ららの望れしはまさをねよ牛
母も馬も志踏しこひさし
難波津や田標のぬこま冬あひり
志しこまき居る人あそんさあそ
先祝へ梅をこころ乃ぬも隠

○ 朽くも伊吹をいんくや冬も就
 為らぬらにあまの神の海もあは
 事月のかゝる源川の香もあはく
 却出さぬ神念慈麻乃日敷く
 清影傳や沖のやうに酒文外
 菊影伝きりあしきく清影講
 蛭子縁酢賣り袴着きんぐり
 ぬり帯の存長ぬりふく守講
 文梁耳石切乃日

口切りて塚乃庭をたのしむ
 炉心もきくや友老ゆへに髪は霧
 本くくは方きく牛も由子ぬらうか

牛畫韻

あくくくや竹もくくくく志もまらぬ
 風や頬をぬらぬ人忠 顔
 本穀風も山吹くくくかたつら

同新撰養正拾遺巻

京子あまきく世本にやま信君
あな指現をひらき

美人よわの姿をちり世海無事川
之尺乃山もあ〜世本の世あま
平田明聖の本三あつては終り
さ〜はま〜 二句

百年世、京色を世乃、海も紫く如
さ〜〜。国やさあ〜ち〜お〜系
道園居士の道若ま〜ゆ〜一〜

ま〜は〜ん〜ゆ〜あ〜そ〜終〜
世のま〜ま〜に初〜二世のま〜
た〜あ〜や〜や〜一〜ゆ〜に〜あ〜
〜ゆ〜あ〜ゆ〜

そ乃〜ち〜ら〜る〜向枯木此枝の長
数回み訪つ社願大よや事筑地
ち〜ち〜ま〜〜ち〜む〜に〜く〜子

世のあ〜人枯〜解〜ふ〜や〜〜
世のあ〜後持を〜ゆ〜

花の枝をよき花をこぼさず
之れを種とするは小畑の八重友
の人月をたずりていふは同人の
結糸

山崎のうらまゝをよき花枝を花

十月八日 橋中吟

旅中病をよき花枝をかけめら
刈給や物よき花枝をよき花の枝

英造耕を別墅

本よりしに白ひやつ草しゆり花
をよき花枝のかけ糸のよき

熱田梅亭花をよき花の枝をよき

水仙や白き清子乃やもつり

之の白き清子の子二人

梅先梅後と名をよき花の枝

梅の白ひ梅をよき花の枝
菊乃後大根花介はよき花の枝
鞍坪母小坊をよき花の枝
大根引

去序子松者まき葉根を喫し
氏士乃大根少のき 嘯う那
冬の事松破子今物なる山さうか

防川亭

多枝探る梅子あかしたる新焙る子
梅椿子笑かめん 保美の里
折りりる盆入探さうゆん桂
芥燈やすう漏乃田井のまゆ水
杜園の序を尋るく 二句

麦をこくくよ記らる事あや富む
はまこころそあまこたまたまおのる
か貝山の公金霜うり啼く急き

病中

茶のむさうてき茶の枕う那
着れあふのゆもてんせうと船の事
深川大橋成読り時
あまこころこころ路をくはる
かしくと折ふし凍し舟乃霜

段の子にもまゝあやふらと拵くんし
物もあやさいまの店へ一羽ある

山中の子をたとせし

まの雪に巻の皮乃拵仙道

南部まゝ

初ゆまやりの大佛乃まゝらま

拵り

まの拵まや雪少傍此後まの巻

初雪や拵かゝるまの拵まゝらへ

まの雪や水仙の葉のまゝまゝ
拵まゝまゝまゝまゝまゝまゝ

ま見まありま

市人の子はまゝまゝまゝ雪のま

旅人もま

馬まゝまゝまゝまゝまゝまゝ

まゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝ

中河一旅人のまゝまゝまゝまゝ
まゝまゝまゝ

雪の昔人今宵即ち此名月を

深川ハも夏の中

年四つ下雪乃侍也投乃中

對友人雪良

君火くけとき物んきん雪丸を

閑居の歳 おまゝ

酒乃めとてく様もきねおの雪

雪海の歌本陣業三言亭に伝

くふ花も井持草の君都を

そととゆてはくはに結りくもて

系まきくとまてくゆもや雪は雪

熱田の文御は雪もあめ

○ 磨石を流も流し雪も雪を

去年の雪の雪をとおまひおま

越人よ雪

二人は雪を雪を雪を雪を

雪も雪も雪の雪の雪の雪

いさらは雪も雪も雪も雪も

をのうきよは誰人ともん世のまひり
もて若の屋志加の里にこそまひり
とけりいまた津松をあるを月と
よ若の屋の許子にけりかきつる
かきつるつわもかりるるを
かねの尼乃を解や志加の屋

湖水睡室

比るにこよそつものせしむの橋
つひに中もむ島を志加の屋

小町画渡

まよとや雪のうらめしき
雪のうらめしき雪のうらめしき

舟乃渡

舟のうらめしき雪のうらめしき

山画渡

山画のうらめしき雪のうらめしき
雪のうらめしき雪のうらめしき

自画自續

○いのかうしんまやまやま交乃り捨りま

膳所の草庵を人々訪ひたる

雲あせよ細代の少魚若くせん
雑飲より翌翌ましく朝のあけは
○おきしるしんまやまやま交乃り捨りま
雁さうくもおれ田面やまきりる
かゝ雑言向也乃瘦もまきりの中
月花のあま針とらん寒乃り入
樽あま波をまきり腸あるおきり

茅舎買水

少若く偃嵐の烟をうらむをきり
すくもりやる上り水は新は海
瓶破く未だ少きを挿るる
こも焚くも拭あふるこもり
越人々吉田の記

まきり二人格をまきり
仙化父乃退告

袖のまきりまきり
懐襟つ

塩麩の齒とまなまき一魚の棚
葱白くはらとくまきつら那
みよたしくし帆柱とむか入深
屋中書に事辨く

後と云一ツ初らむかか格のハ
まろくは早きまきく火燧ハ
位つのみ益たまらや巨燧
ぬかた廿一のさく

お前のほらとくし受る火桶の方

下井田

少年漢一とくく人な

埋出もまき由や洞の意とる 喜

曲聚梳銘とく

うつと出や望ふまきやめ新法所

モ丸の後

おまの石や志めお前の丸の中
半めつもてとまきんまきつら
はらとく鴨の意とくかのまき白
毛衣よつとくぬか一鴨の足

唯續の漢文を以てして其の意を

漢文の意を以て

○ 皇朝の國を以てして其の意を以てして

○ 皇朝の國を以てして其の意を以てして

○ 皇朝の國を以てして其の意を以てして

伊の古蹟を以てして其の意を以てして

乃ち其の意を以てして其の意を以てして

乃ち其の意を以てして其の意を以てして

乃ち其の意を以てして其の意を以てして

雁子一ツ刀付くうまう一ツらと
生れ一ツあまなる生海風外
いづれもふたのあまのいづれ

藝回

○ 遊のまの純物といふ七里まで
ゆけや鯛もその子も分別
中備の極七色もその子も分別
納豆もその子もその子も分別
その子もその子もその子も分別

昔も昔もをさすのころふ出まゝのま
くれくく解を本魂の徳傳れ
みぬも子に子にぬく餅乃ち
煉掃やまのけりさのころ新
縁を渡りてやうな毎に煉掃
行脚の五雲一具箱波子ゆき
くもをさす解をさすのころ
くも世乃煉掃かきぬぬ古盒子

旅行

煉掃も移の本乃雪の嵐の那
すくもさす己の棚つた大工
月白を脚走る子路を掃き
何れも此は走れ市子めく
かきぬも解をさす海のふり
自れ市路も實に出るや
くも意なるくも年乃定なる

洛師雲別當景樞九興行

半りも神と交ぬやゆき

乙あり新たままをたてまつる

人まゝおと首をもてふち年より

魚身おひり〜〜〜わすま

下ひいれ〜〜〜横嫌〜

口すも早草飯子持ん年の書

旅持舟〜〜の〜

○ 山〜〜おぬら〜〜

とて〜〜世そ〜〜

と〜〜おぬら〜

弟そ〜度人のねま〜ん老の書

月を〜とら〜〜〜年忠る春

ぬ〜里や脰の結み〜〜

泣〜人〜中あ〜〜夜も〜

鈴乃〜生〜甲ぬ〜あ〜

分〜お結底〜〜身〜

雑

夕べの舟の流るるをみて

世もあつても又も家紙のやうな

と尋人問

月花の古まや珠粒あるしき

葉をとりけるもまた枝葉坂に

すふ為難くもあつてくるもの

よりのなると杖つき坂を流るるも

下冊八

船よきよ誰まの崎を片あつて

くさぬ湯屋よめは杖の形

酒のこゝろ人乃経

月花もさく酒のむらりわ

花は彩得よ

海にぬる雨やさくたうき身者

布衣裳の強穢

物かや衣裳の中乃月と毒

寛政元歲酉七月再版



洛陽蕉門書林

井筒屋庄兵衛
橘屋 治兵衛

下

蕉門俳書畧目錄 書林

井筒屋庄兵衛
橘屋 治兵衛

奥のふろろ 一冊 芭蕉翁

俳諧浄筆 十冊 貞徳

同 菱菰抄 二冊 梨一

風俗文選 九冊 許六

俳諧埋木 一冊 季吟

いづを著 一冊 其角

葛子松原 一冊 支考

笈の小教 笈の地 一冊 乙州

森山ふひ州 一冊 支考

續五論 一冊 支考

笈日記 三冊 支考

枯尾花 芭蕉翁 二冊 其角

笈実 一冊 季由

津島く護 五冊 支考

芭蕉新繪詞傳三冊 蝶友
荳門俳諧語錄二冊 蝶友

同 發句集二冊 同
去來 發句集二冊 同
文州

同 俳諧集二冊 同
去來抄 二冊 蝶友

同 文集二冊 同
芭蕉門古人真蹟二冊 蝶友

同 附合集二冊 葦村
新考く記 一冊 同

同 七部集
其れ日あの日記とて岸々集
猿の續さるるあはれ集
小刻全二冊

同 大字子紙本七冊 再刻
改正
去來新編中集編一冊 重字

同 續編
海川即石集有海海
續編
小刻全二冊

本朝文鑑假名文集五冊 甚二坊
類題發句集五冊 蝶友

新撰大和詞日本助語二冊 同
新類題句集五冊 同

和漢文操假名去名七冊 同
和とくと言 二冊 龜貴

古今抄再撰貞享式
括定十箇条五冊 同
鬼貴句選 二冊 葦村

俳諧十論新古評編二冊 同
菱井句集 三冊 杜養

同 為辨抄 秘笈三冊 同
同 後篇 二冊 素乃

和漢百花賦 一冊 同
善柳發句集 二冊 後川

百一集表の巻送發句集
石人の画傳一冊 康二
千代尾句集 二冊 既白

白樂

川上之...
川上之...
川上之...



其角七部集 <small>みかづり 兼 秋山家不持集 流續院 流ら家流 志家 秋の流 小刻今叙二冊</small>	俳諧名所小鏡 <small>四冊 蝶友</small>	己之と終極 <small>二冊 尚白</small>	名種發白集 <small>三冊 蝶友</small>	姑射文庫 <small>画後集 三冊 曉齋</small>	慈門書 <small>二冊 既白</small>
眞寶年詔州 <small>去友 秋多 兼五冊 二部集 流續院 志家 秋の流 小本 五冊</small>	二冊 尚白	句州 <small>二冊 香子</small>	芭芭蘇行狀記 <small>一冊 晴色</small>	挑燈人 <small>二冊 北枝</small>	白扇集 <small>二冊 流化</small>
	二冊 蝶友	句州 <small>二冊 香子</small>	芭芭蘇行狀記 <small>一冊 晴色</small>	挑燈人 <small>二冊 北枝</small>	白扇集 <small>二冊 流化</small>

